

エッセイ

「たかがイヌ、されど犬」

雨宮 美千代

*犬の起源

およそ5千万年前にミアキスという肉食哺乳類が出現する。(体長約30センチ) 犬たちの基礎となった最初の動物といわれている。

ミアキスはその化石から現在の肉食動物と同じ歯形で、爪は鉤状であったことから樹上で生活していたことが分かっている。森に残っていたものが猫の祖先となり、森から草原に向かったものが北アメリカで進化したトマールクタスとなり、犬の祖先となったといわれている。(約2千年前) しかし、近年の研究によると、他の対立候補の出現によってどうやらそうとも限らないという考えが主流になってきているようだ。他の祖先候補としては、始新世から中新世にかけて生息していたボロファガスやアエルドンなどの肉食獣が挙げられるが、ここでは従来のトマールクタス説をとることにする。

トマールクタスはキツネ・タヌキ

そして犬の直近の祖先であるオオカミを生み出していく。やがて人間のそばで生活するオオカミが出現する。30〜40万年前の世界各地の遺跡から人と一緒に埋葬されているオオカミの骨が見つまっているが、まだこの段階では猿人、原人の類であり「人」とは呼べる範囲ではなさそうである。

世界各地に点在する約1万2000年前〜3万5000年前の遺跡においては、人間が居住していた住居跡や洞窟の中から犬の骨が見つかり、犬が人間と共に墓に埋葬されているものが見つかった。

オオカミ・犬の遺骨が発掘された遺跡はいくつかあるが、日本列島では縄文時代に犬の骨が出現する。犬は世界最古の家畜といわれる。これは群居性と社会性の強さという人に似た社会構造を持つオオカミが、比較的早い段階で人と共生し、強固な主従関係が結ばれたことによる。犬の家畜化の起源については、遺伝学的調査から、インドか西アジアで最初の家畜化が行われた後、人とともに東西に移動したと推定される。

*遺跡発掘例

- ・イギリスのポックスグロブ40万年前(オオカミ)
- ・中国の周口店30万年前(オオカミ) 7千年前(犬)
- ・アラスカのオールドクロウ川付近2万年以上前(犬)
- ・夏島遺跡(神奈川県) 9千5百年前(犬)
- ・栃原岩陰遺跡(長野県) 縄文早期(日本オオカミ)

神奈川県夏島貝塚で見つかった犬の骨は約9500年前のもので推定され、日本では最古の物で世界的に見ても古い部類に入る。その他、愛媛県上黒岩洞窟では埋葬された犬の骨も発見されている。詳細は後述する。

宮城県田柄貝塚では二十二体の埋葬犬の骨が出土している。(縄文後期から晩期初頭の貝塚)
以下、栃原岩陰遺跡発掘調査報告書(昭和58年度)からの抜粋である。

「第23層から左第3中足骨の遠位半部1点が見出された。この骨片は焼かれて灰白色を呈していた。第15回までの発掘においても若干のオオカミ遺存骨と歯が出土している。また、犬歯に穿孔した垂飾1点も出土している。オオ

カミの遺骸の出土例は貝塚その他30ヶ所ほどで確認されているが、1遺跡での出土数が少なく、特殊な部位(犬歯、下顎骨など)に偏していること、穿孔などの加工をみるという特殊性があるといわれる。栃原遺跡の場合もこの指摘に合致するように思われる」という報告である。

これらからオオカミを食料として、骨は加工して利用する用途があったものと思われる。

日本列島における埋葬された犬の発見例としては、愛媛県久万高原町の上黒岩岩陰遺跡がある。1962年に発掘された遺跡から3点のイヌ骨が出土し、二体分の犬骨はそれぞれ縄文時代早期末から前期初頭に相当する放射性炭素年代が得られた。また、形態観察の結果、従来知られている縄文犬とほぼ同様の形質的特徴を備えていることが確認されている。左側下顎骨破片から体高45センチメートル前後の中型犬と推定され、埋葬事例の最古犬とされる。さらに、同二体分の犬骨については、既に古代DNA解析や安定同位体分析も試みられている。日本最古の犬骨が発掘されたとして知られる神

奈川県夏島貝塚の出土下顎骨群も含め、縄文時代早期の犬骨に埋葬された状態で発見された資料がなく、また、これまで骨自体から年代測定を試みた前例もない中で、全身骨格の特徴も把握できる前期初頭以前の犬骨を発見できたことは大きな意義をもつ。

縄文時代の犬は総合研究大学院大学データベースによれば2007年時点で397遺跡から出土している。関東地方が最も多く、犬は縄文早期から出現し、縄文中期から縄文後期にかけて出土遺跡数・個体数が増加、縄文後期には墓域に関わる出土事例が増加し埋蔵事例も増える。

ほかにも佐賀県佐賀市の東名遺跡からも縄文早期の資料が出土しており、いずれも上黒岩岩陰遺跡と同様の中型犬と推定されている。埼玉県富士見市の水子貝塚では縄文前期の埋葬例があり、飼育されて家畜利用されていたという説がある。

なお、上黒岩岩陰遺跡・夏島貝塚出土の骨は長らく行方が分からなくなっていたが、2011年3月慶応大学の考古資料収蔵庫で資料整理をしている際に発見され、

放射性炭素を使った年代測定で、縄文時代早期末から前期初頭（7200〜7300年前）の国内最古の埋葬犬と結論づけられた。

* イエイヌの誕生

犬はジャツカルやコヨーテから派生したのではないかという説もあったが、近年のDNA解析でオカミが起源であることがわかっていて、オカミは約40〜30万年前から人との共存を始めていたと考えられている。犬の祖先であるオカミは群れで狩りをする動物で、人が定住生活をする前の遠い昔、オカミの一部が、獲物を追って移動する人の群れの近くにいると残り物にありつけることに気付いて両者の距離は近くなる。人が定住生活を始めるようになった頃には人の群れの一員として、付かず離れず暮らすようになっていく。

1万4千年前頃の遺跡から発掘される骨は現在の犬の骨とほぼ同じものでこの頃から人間と暮らすイヌ科の動物は「イエイヌ」になったのだと考えられる。

「イエイヌ」とは、現在我々が一般的に「犬」と呼称する動物のことを指し、「イエ」とは「家畜

化された」という意味である。「イエイヌ」は1997年に行われたミトコンドリアDNA解析の結果、オカミの子孫であることが判明し、「イエイヌ」とは、今から約13万5000年前に、オカミから派生した突然変異種である」という事実が証明された。この証明により、従来有力だった「イエイヌとはオカミとジャツカルとの混血である（コンラート・ローレンツなど）」という説が否定される結果となった。2010年のDNA解析で最も近いのは中東の灰色オカミであることも報告されている。

* 動物の家畜化

日本で犬が飼われるようになった時期はよくわかっていないが縄文時代には確実に飼われていた、犬以外の家畜としてはウシ・ウマ・ニワトリ・ヤギ・ブタがあげられるが発掘された骨の年代測定から（その骨に含まれる炭素の放射性同位元素の比率）もとも古い家畜の骨は犬のもので、今から9千5百年前のものであり、ウシ・ウマ・ニワトリの骨はいずれも2千3百年くらい前の骨が最も古く、それ以前には、まだ日本にはいなかった。

たと思われる。ウシやウマは弥生時代になってから朝鮮半島を経由して導入された。ニワトリもほぼ同じころ。ヤギが琉球列島を経て九州の一部に入ったのは十五世紀以降で、ブタは古代の日本では家畜化されていなかった。ネコは奈良時代末から平安時代初期に中国から入ったと思われる。世界での遺物の出土状況を見るとヒツジは1万2千年前、ヤギは1万年前、ウシは9千年前、ウマとニワトリは5千年前、ネコは4千年前に家畜化が始まったとみなされている。したがって、日本の縄文時代の家畜としては、犬が唯一のものであった。縄文時代の犬は40センチ位の小型犬で、柴犬位の大きさだが現代の犬とは相当の差があった。

* 遺骨から推定される特徴

頭蓋骨・四肢ともに頑丈、前頭部から鼻にかけての段差が小さい、口吻部が太い、頬骨弓の幅が小さく顔の幅が狭い、歯の摩耗や生前の破損が著しく、歯の異常な萌出などがほとんどない、オスとメスの差が現代の犬よりも大きい。

遺伝学方面からのアプローチでは、田名部雄一氏らの研究グルー

プが日本犬、韓国珍島犬、台湾在来犬、アジア・東洋犬、西洋犬、約九十種、合わせて4千匹の犬から血液を採取して種々の標識遺伝子を分析調査した結果、

・日本犬種と西洋犬種の遺伝子構成には大きな差があり、台湾犬種と北海道犬種の遺伝子構成は北海道犬種を除く日本犬種と西洋犬種との中間にある。

・西洋犬種と比較して日本犬種に高い頻度で存在する遺伝子を韓国在来犬種に見いだせる。

・韓国の在来種に高い頻度で見られるいくつかの遺伝子は九州・本州・四国・対馬などの在来種には一般にみられるのに対して、北海道犬や琉球列島の在来種には少ないか全く見られないことなどが分かった。

これらを総合すると日本の最北端の北海道犬と最南端の琉球犬・西表在来犬・屋久島在来犬で1グループ、三河犬・山陰柴犬・対馬在来犬が韓国珍島犬・济州島犬に近い2グループ、秋田県・紀州犬・信州柴犬の3グループは1、2グループの中間に位置し、美濃柴犬・四国犬は遺伝的には異なっているが2グループとの関係がみられる。

以上の遺伝子の分析から南中国原産犬や台湾在来犬に近い南方系の犬がまず初めに日本にもたらされ、北海道まで行き渡ったのちに別の犬種がより北方の別のグループ、すなわち朝鮮半島経由で入ってきた。本州・九州・四国では両者の混血が進んだが北海道や沖縄の犬は混血することがあまりなかった。と推定できる。

これを日本人の起源と関連させて考えると、縄文犬を連れた縄文人が南アジアから入って北海道に、その後、弥生時代、古墳時代にそれぞれ朝鮮半島から渡来人が犬(弥生犬)とともにやってきた。以後、本土では犬・人間ともに両者の間で混血が起こったが北海道や沖縄ではこのような混血はあまり起こらなかった。(アイヌや沖縄では縄文人の遺伝子を多く持っていると考えられる。)

縄文時代の犬は狩猟のパートナーとして大事にされ、丁寧に埋葬された例も多くみられるが、弥生時代になると遺跡から発掘される骨が減り、且つ、頭骨に傷があるものが多く食糧として供されていたことがわかる。犬に対する扱い方が変化するのである。

*書物・史料に登場する犬

『魏志倭人伝』には「倭国には牛、馬、虎、豹、羊、鶻無し」との記述がある。実際にはすでに3世紀に牛馬が入っていたのは事実であるが、数が少なかったことを示しているようである。『日本書紀』によれば、特定の動物を飼育する飼部が作られた。鶏を飼う鳥飼部、鷹を飼う鷹飼部、馬を飼う馬飼部である。犬を飼う犬飼部は安閑天皇二年(538)八月、同年五月の屯倉の大量設置をうけて国々に設置された。穀物の盗難を防ぐとともに、イヌにネズミを捕らせる目的があったと考えられる。番犬である。普通ネズミ捕りはネコの仕事だが、ネコが我が国に入ってきたのは、奈良時代に入ってからで、数が増えたのは平安時代になってからのこと。それ以前はイヌがネズミ退治を担っていたようである。(韓国の珍島では珍島犬がネズミを退治する。)

『日本書紀』ではヤマトタケルの一行が東国平定の帰還途中、信濃で山の神の化身である白鹿を殺した後、道に迷い白い犬に導かれ

た話。

『古事記』では雄略天皇が妻問に行く途中に見かけた村長の家が立派であることに腹を立て、火をかけようとしたところ、村長は恐れかしくまわって白い犬を献上したので天皇はそれを妻問の贈り物にした話。

他にも『播磨国風土記』『今昔物語集』などにも白い犬の話がみえる。白い獣は靈獣として扱われることが多いが、白い犬は瑞祥とはなれなかった。10世紀ごろまでには数が増えて珍しいものではなくなっていたのであろう。

『枕草子』には翁丸事件が記されている。(詳細は六段を参照)ここに出てくる翁丸という犬は涙を流したと書かれている。

絵巻物の中にも犬が登場する。『信貴山縁起絵巻』の中の野良犬や平安貴族の館の縁の下に住み着く犬が描かれている。

13〜19世紀にかけては「犬追物」と呼ばれる競技もあった。これは馬上から犬を的とする訓練である。(殺傷力はない矢を使用)『吾妻鏡』・『太平記』には「追出犬」の様子が書かれており、狩りの訓練として日常的に行われていた

しい。

江戸幕府では鷹犬に出身地の地名を冠して呼んで猪鹿猟に用いる犬も飼っていた。

町犬については將軍綱吉の時代には「犬毛付帳」という毛色の書かれた犬の戸籍のようなものも残されている。(白ぶち男犬・赤女犬等)

また、江戸時代には特別扱いられた犬がいる。「狎」である。狎とは「小さい犬」に由来する呼称で小型の愛玩犬である。日本には犬を室内で飼う習慣はなかったが、狎だけは例外的に室内で飼われていた。そのため狎は犬と見做されず、犬と猫の中間に位置する動物と認識されていたようだ。

江戸時代に流行した伊勢神宮への参詣にも、愛犬が代理となった。飼い主に路銀や「お伊勢参り犬」と書かれた名札を用意してもらい首につけて出発する。道中は宿村の役人などに世話してもらい送り届けられるのである。多くの書物に書かれ、名札などの遺物も残されているようである。

聖徳太子(愛犬雪丸)、藤原道長(「宇治拾遺物語」の逸話)、徳川綱吉など歴史上の人物にも犬好

きとして知られる人物が数多く存在する。

このように、犬は古くから人間の生活においてかけがえのない存在として活躍してきた。

*終わりに

遣伝子データ上、新たな面も明らかとなっている。地域や外見が異なる犬の種類でも遣伝子が似ている場合がある。アジア犬とみられていたシーズが実はジャーマンシェパードよりもオオカミに近い親戚であり、「古代からの犬の種類」であつたといわれ、古代エジプトの壁画にも残されて、起源は5千年にも遡るとされてきたフアラオ犬が、実は長い歴史の中で一度絶滅し、近代に復活した古代エジプトとは関連性のない新しい種類であることも分かった。

狩猟・番犬・荷役犬、1957年ロシアのバイコヌール宇宙基地からスプートニク2号に乗って飛び立ったのはライカ犬である。人間の歴史はそのまま犬たちの歴史にもなり得る。

ペットとしての愛玩犬(今やコンパニオンアニマルと呼ばれる)のほか、人の歴史とともに、猟犬・番犬・食用犬・牧羊犬・軍用犬・

闘犬・運搬犬・救助犬・探知犬・盲導犬・介助犬・セラピー犬と人間の生活に関わり、役立ってきた犬たち。昔の野良犬、野犬狩りなどという言葉も使われなくなって久しい。

人と犬との歴史はこれからも作られていくだろうが、かかわり方の多様性に注目していきたい、様々な可能性を秘めているのだから。

参考文献

- 『犬から探る古代日本人の謎』
- 『犬の考古学』
- 『ドイツの犬はなぜ吠えない』
- 『くわしい犬学』
- 『犬の日本史』
- 栃原岩陰遺跡発掘調査報告書
- ウィキペディア参照

追記

港区立郷土歴史館を訪れた。この建物は東大安田講堂と同じ設計者、内田祥三氏により昭和13年に建てられた旧公衆衛生院である。

「内田ゴシック」と呼ばれる特徴的なデザインで、ロックフェラー財団の支援で作られた貴重な歴史建造物であり、博物館としては室内が非常に明るく、展示も見やす

い。キャプションをタッチパネルにし、有料個所はバーコードの自動改札で最先端をいつている。展示物の中に大名家に飼われていた江戸時代の犬の墓石があった。年月日と犬の名前が刻まれている。

「文政十三年庚寅 素毛脱狗之霊 七月二十日、側面に「高輪御狎白事」とある。「白」という名の狎の墓で、ほかにも三田の屋敷の大奥で飼われていた「染」という名の狎や「亀」という名の犬の墓石がある。犬なのに亀とは、長寿を願ってつけられたのであるうか。明治・大正の頃の小説には、しばしば犬を称して「カメ」という言葉が出てくる。

「カメ」とは洋犬または洋犬と日本在来犬との雑種のことであり、英米人が愛犬に呼びかけるのに「Come here」というのを日本人が「カメヤ」と呼んでいるものと誤解したのが始まりといわれている。なかなか興味深い展示ですすめの博物館である。